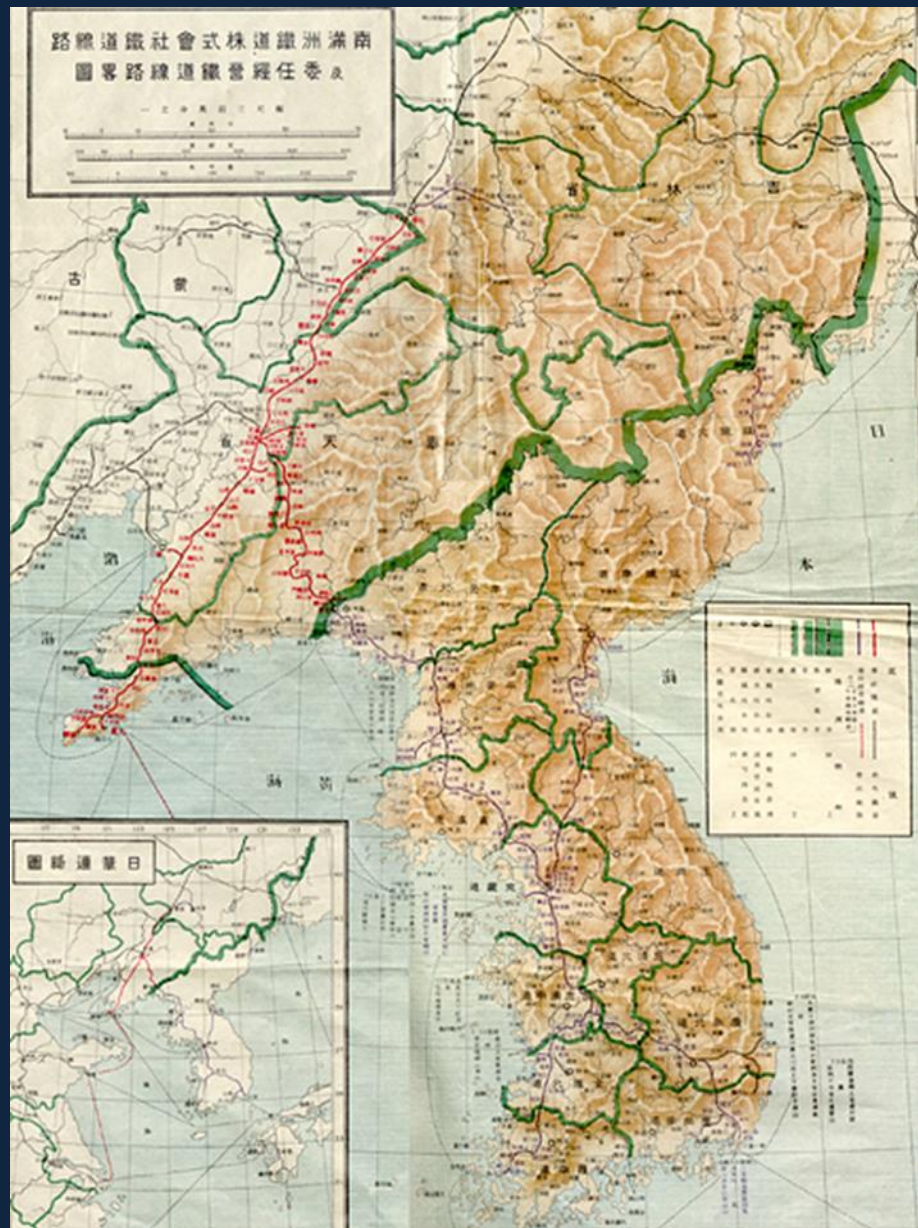
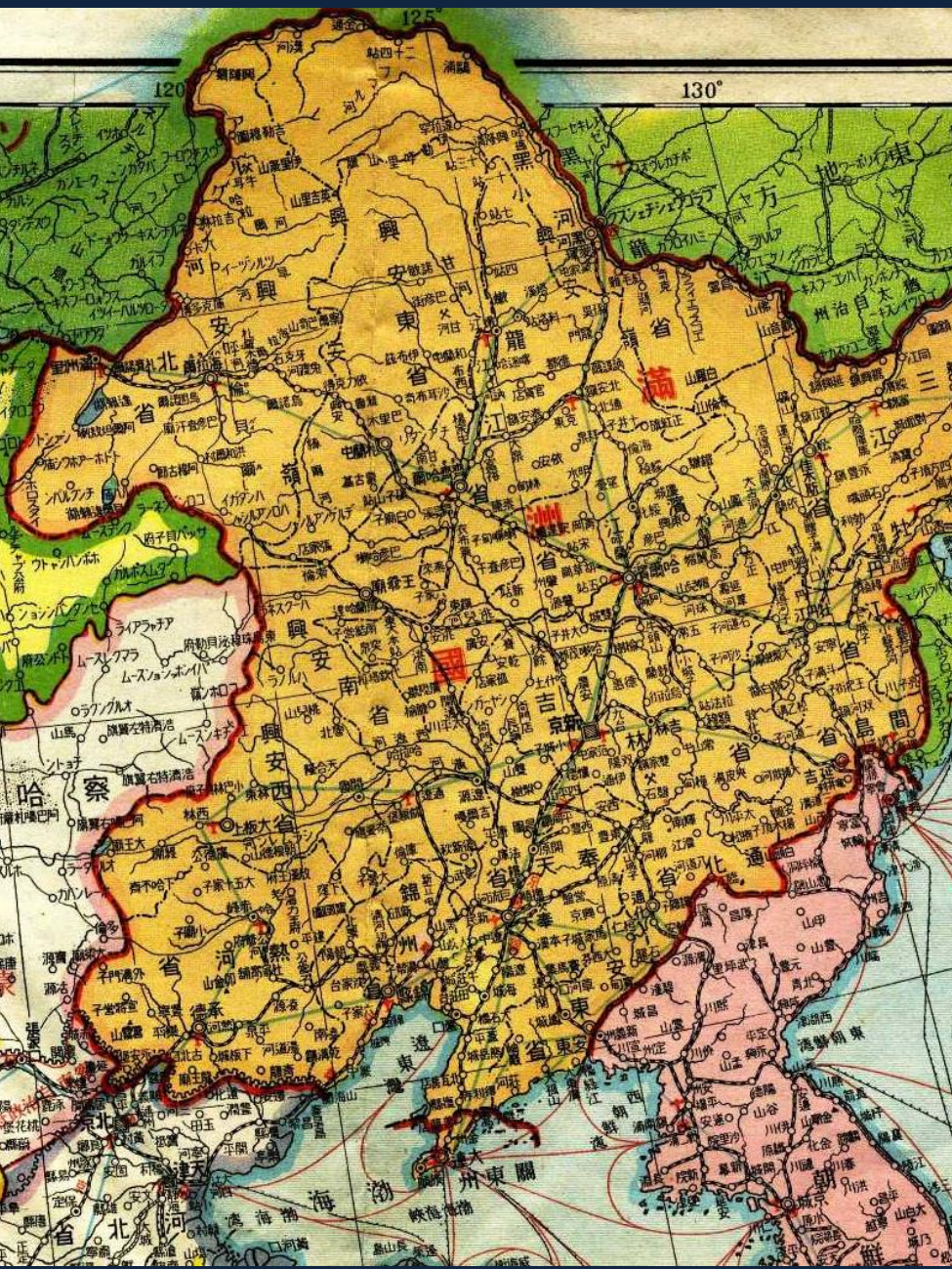


日中戦争の展開

塘沽停戦協定からトラウトマン工作まで

前史

1. 塘沽停戦協定
2. 日中緊張緩和
3. 華北分離工作
4. 中国の対日硬化



1.塘沽停戦協定（満洲事変）

目的：満洲国と中国本部との間に非武装緩衝地帯をつくる

• 日本側

①国際関係—国際的孤立

②政策・作戦上の理由

満洲国の治安問題

占領統治に関する計画が
立っていない

③天皇の不满

• 中国側

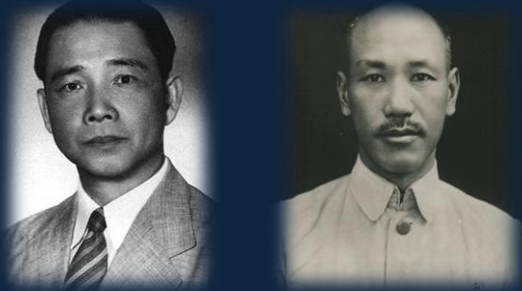
対日政策の行き詰まり

→二国間解決の拒否から
局部的対日妥協



2. 日中緊張緩和

- 汪兆銘・蔣介石合作政權 安内攘外
一面抵抗、一面交渉



- 三通（通郵・通車・通関）の解決
- 大使館昇格
大使交換



3. 華北分離工作

- ① 満洲国の安全のため中国本部との間の緩衝地帯を拡張する
- ② 華北の資源開発を進めて自給自足圏の充実を図る
- ③ 外蒙古（現モンゴル共和国）におけるソ連の勢力に対抗し、内モン古に進出するための足がかりを得る



→日中関係は悪化

4. 中国の対日硬化

- 汪兆銘狙撃
→対日妥協を行っていた汪兆銘から蒋介石に
- 蒋介石の認識変化
 - ①国内の統一
 - ②抗戦準備の急速な進展
→譲歩しない中国
- 西安事件
→対日妥協はさらに困難に

盧溝橋事件から全面戦争へ

1. 事件の概要
2. 現地の状況
3. 日本側反応
4. 中国側反応
5. 統制を欠く29軍
6. 日本側の反発

背景

- 1936年に増強した部隊を豊台に駐屯
- 1937年6月末から盧溝橋附近で連続して演習
- 6月26日から北平（北京）は戒厳令
- 7月には日本軍が武力行動を起すと噂
- 7月9日から16日に実施予定の検閲に向け演習

1. 盧溝橋事件の概要

- 7月7日午後10時40分ごろ、永定河畔で対ソ戦の夜間演習を行っていた日本軍に対して、何者かが実弾を数発、発砲
- 呼集ラッパを吹いたところ、さらに同方向から実弾10数発が発砲される。
- 呼集の結果、兵一名が行方不明であったため、捜索を行い、中国側と接触を開始（兵はその後すぐに発見）
- その間再度銃撃を受け、8日午前5時より戦闘開始
- 最初の本格的な戦闘は約2時間程度で終結

- 第一報（日本側：1937年7月8日午前3時21分）

「豊台駐屯地歩兵第一聯隊第八中隊は昨7日午後十時頃盧溝橋北方約千米突竜王廟附近にて夜間演習中支那軍より突然十数発の射撃を受けたる為直に演習を中止し人員点呼の結果兵一名不足しあるを発見したるを以て調査を続行すると共に豊台部隊に急報せり、豊台部隊は部隊を集結して不足せる人員の調査と不法部隊の非違を糾弾する目的を以て盧溝橋に向ひ前進し其他主力を通州に派遣しあるを以て取敢へず之を北平に招致中なり。又盧溝橋駐屯の支那軍は第三十七師第一一〇旅第二一九団の約二ヶ中隊にして同地付近には約八ヶの礮堡ありて竜王廟附近も少数部隊にて守備し居たり」

- 第一報（中国側：1937年7月8日辰の刻（午前8-10時））

「豊台駐屯の日本軍が砲4門、機関銃8挺、歩兵500余人をもって、7日夜12時から夜間演習を口実として我が方に向かって射撃した。我が盧溝橋城（宛平県城）を占領しようと包圍攻撃し、砲撃は激しく、我が方は盧溝橋駐屯の大隊によって正当防衛を行っている。やむを得ず対応せざるを得ず、現在もなお対峙中である。事態を拡大させないため冷静に対応するほか、どのように処置すべきか指示を請う」

2. 現地の状況

8日午前0時 日本側と中国側との間で善後処置について連絡開始

午後7時 現地日中担当者が会談：日本側が盧溝橋より中国軍が撤退することを要求したのに対し、中国側は極力事件の拡大を回避するも、撤退は両軍同時に実施し、治安維持のため一部の部隊を残置したい旨回答し、事態の不拡大以外に合意には至らず

9日午前2時 第29軍張自忠より支那駐屯軍司令部に無条件で午前5時の同時停戦を了承し、永定河西岸へ撤退すると連絡あり

午前5時 中国側より砲撃

- 11日午後5時 停戦に関する現地協定成立
- 17日 張自忠より日本側停戦協定第三項実施細目要求を
ほぼ承認する申し出、19日調印（宋哲元は内容把握せず）

→現地では事態は一旦収束に向かう

3. 日本側の対応

- **陸軍**
- 拡大派
参謀本部作戦課、参謀本部支那課、陸軍省軍事課
→ 「対支一撃論」
- 不拡大派
参謀本部作戦部長、参謀本部戦争指導課、陸軍省軍務課
→ 「対ソ戦備の弱体化を危惧」
- **海軍**
- 全面戦争に拡大するのを危惧（当初陸軍の問題と静観・対立回避を望む）
- 第二次上海事変を機に強硬化
- **政府**
- 当初不拡大、その後居留民保護を目的に派兵同意
- 全体として初めは不拡大で、徐々に対中一撃論に変化していく

4. 中国側（中央）の反応

- 7月8日 29軍に盧溝橋死守を命じ、4個師の増援、中央軍北上を命ず
- 7月9日 「積極的に準備をして決心を示さなければ、平和的に解決することは不可能である」
→部隊を北上させて戦いに備え、戦いを避けないことを決意
- 7月12日 日本側総攻撃の情報を入手し
蒋介石は戦いは避けられないと認識
また、29軍は「内部で張自忠を矢面に立たせて倭と妥協しているのではないか
- 7月16日 日本の増援派兵の情報
- 7月17日 応戦を決意。交戦後も宣戦せず、満州事変時と同じ状況におくことに決定
- 7月22日 関東軍、朝鮮軍から派遣した部隊に対する兵站部隊が朝鮮半島に到着
→日本側の大規模動員と誤認

→中国側は日本の計画と誤解

5. 統制を欠く29軍

- 29軍：元来西北地域の軍閥系軍隊（非中央系）
日本の要求により北京周辺に駐屯 軍長：宋哲元
一部抗日色強い（37師：馮治安）
- 内部は和戦両派に別れる（閻錫山の観察）
主和派：張自忠（親日：宋哲元に近い）
主戦派：馮治安・秦徳純（抗日：中央に近い）
- 主和派との協定が主戦派によって破られる。
→宋哲元の統制効かず
- 中央とのコミュニケーションもままならず

盧溝橋事件から廊坊事件までの発砲事件等

日時	事件
7月10日	日本軍将校斥候へ迫砲撃
7月13日	日本軍トラックを38師の兵が爆破 (4名戦死)
7月14日	日本軍騎兵1名惨殺
7月16日	日中両軍の砲戦
7月18日	日本軍偵察機への射撃
7月19日	宛平県城内より日本軍を砲撃
7月20日	宛平県城内より日本軍を砲撃 日本軍の報復砲撃

- 宋哲元は冀察首領ではあるものの、その中心は29軍にあり、またその魂は蕭振瀛とその各師長にあり、終始中央を擁護して対外一致を目的している。…最近宋氏が結んだ各協定は中央の批准を受けていないばかりか内部（すなわち蕭および各師長）の強い反対にあっており、そのため色々と実行したいと思っても、至る所で相容れず食い違ふ。また、宋は全軍を統率することができず一致して媚日する能力もない。そのため失望は大きく、失望は怨恨を生みつつある

（孔祥熙文書 H. H. Kung Papers, Hoover Institution Archives, Box 15, Folder 1）

- 29軍の各師長・参謀長等を訪問したところ以下の結果が得られた。…張自忠、趙登禹、張允榮、齊燮元などは主和を積極的に主張し、主戦者はわずかに馮治安、秦徳純二人である。宋の交渉原則は、29軍の現局面を破壊しなければ、どのような条件も承認するというものである。

（戴笠「情報」7月16日呈 蔣档002-08020000493037）

6. 日本側の反発

- 廊坊事件（25日）：駅付近の軍用電線修理中に射撃される
- 広安門事件（26日）：居留民保護のため城内に入場した部隊に攻撃
- 橋本支那駐屯軍参謀長：武力行使を「現地デ本当ニ決心シタノハ広安門事件ノ時」
- 参謀本部作戦課西村敏雄：日中戦争は「廊坊事件ヲ以テ新ニ始マッタ」
- 26日 29軍に対して最後通告

→ 華北総攻撃 北京陥落

全面戦争から南京陥落へ

1. 中国の積極抗戦への転換
2. 蒋介石の抗戦方針
3. 中国の抗戦と中独関係
4. 上海戦線
5. 南京攻略戦と南京虐殺事件
6. トラウトマン工作

1. 中国の積極攻勢への転換

- 7月末より上海での戦闘を準備
- 7/23：上海のガソリン・通信機材を全て購入するよう命令
- 7/30：教導総隊に対して江南岸に集中するよう命令
- 8/7：国防聯席会議：抗戦と積極戦備が決定される
- 8/9：大山事件を機に上海の緊張高まる

「中央は上海を包囲攻撃することを決心し、今晚以下のように処置した。87師、88師を予定された包囲線に前進させ、上海包囲攻撃の準備するよう張治中に命じた。」【中国軍上海作戦日誌】

- 8/11：大本営、最高国防会議の設置
- 8/12：中央常務会議秘密会議「本日より全国が戦時状態に入ったものと認める」
- 8/13：午前 of 散発的衝突につづき、夕刻より継続的交戦状態に突入
- 8/14：張治中が蒋介石に対し午後5時より総攻撃を開始する旨報告。
- 同日午前より中国空軍の爆撃も開始。

- →全面戦争の勃発

8月13日閘北でどちらが先に撃ったか？それは我々である。仮に日本が上海で我々と戦火を交えるつもりなら、日本は必ず増援部隊が上海に到達するのを待たなくてはならない。日本軍は上海で戦火を交えたくなかった。そうでなければなぜ彼らは上海でなく盧溝橋を選んだのか。日本は北から南へ一省一省少しずつ我々を食べていこうとしていた。戦略的観点からしても彼らは第二戦場を開きたくはなかった。簡単に言えば、我々は主導権を取ったということだ。日本は盧溝橋で我々を攻撃し、我々は第二次上海事変を挑発した。しかし、私はこのことを『抗日戦争回憶記』に書くことはできなかった。というのも我々はずっと我々は抗戦しているのだとやってきたからだ」

（張発奎口述『蒋介石与我—張発奎上将回憶錄』文化芸術出版社、香港、2008年）

南京に帰った後、領袖（蒋介石）は視察状況について質問した。熊（式輝）は「戦争はできない」と述べた。次に陳（誠）に問うたところ、陳は「戦争が出来るか出来ないかということではなく、やるかやらないかの問題だ」と答えた。領袖は「その意味するところは何だ」と問うた。陳は「敵は南口を必ず攻め、我々は必ず守らなければならない。華北の戦争が拡大するのは不可避だ。仮に敵が華北で勢いを得たなら、必ずその機動的な装備をもって平漢路を南下し直接に武漢に達する。これは不利である。上海の戦争を拡大して牽制した方がよい」と答えた。領袖はついに「必ずやらなければならない」と述べた。陳は「もし打つのであれば、上海に向けて増兵しなければならない」と答えた。そして陳は第15集団軍司令総司令となり、増兵部隊を上海戦に投入し、ここに日中全面戦争は始まった」

「国防部総長辦公室所記陳誠關於七七事變後上海南京退敗的回憶史料」中国第二歴史档案館、軍令部戦史編纂委員会 档案、（25）2864

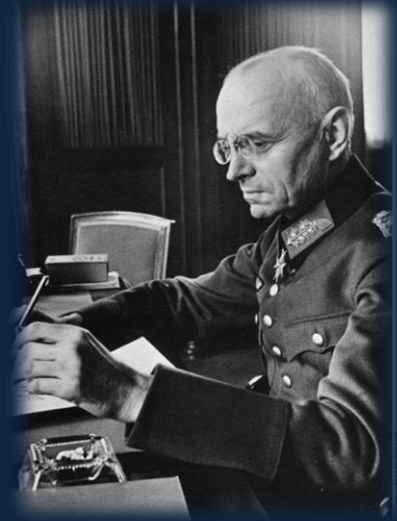
応戦の方針については、積極戦の目標、全面戦の方針を持つほかない。華北の局部戦は敵の企図したものであり、もし我々も同じように局部的に対応したならば、我々は受動的立場に陥り、勝算の見込はない。…むしろ最大の勝算は全面戦を発動し、主導的に中心地域を覆滅しなければならない。

2. 蒋介石の抗戦方針

- **第一段階**：上海を中心とした揚子江下流域において戦闘を行い、国際干渉を引き起こす
- **第二段階**：それでも困難な場合は、奥地を拠点に抗戦する
- 防衛施設の整備、航空部隊の創設、軍隊改革、兵器工廠の設置
→1936年を目途（次期大戦を36年と想定）

3.中国抗戦と中独関係

- ドイツ人軍事顧問による献策
→上海・南京を中心に防衛線や永久陣地の構築・軍隊改革
- 中国からドイツへのレアメタルの輸出
- ドイツからの軍事物資輸入
→ドイツ兵器輸出の50%強を占める

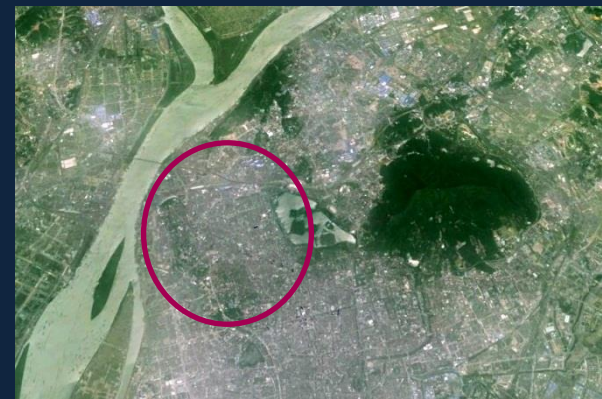


4.上海戦線

- 中国軍の頑強な抵抗
→開戦から2ヶ月：
死者3900名、負傷者1万5843名
3ヶ月で死者9115名、負傷者
3万1259名)
- 主戦場を華北から華中（上海）に転換
- 杭州湾に新たに兵力を奇襲上陸
→背後から挟み撃ちする形をとったため、
中国軍は総退却を開始
- 元来、南京攻略まで考えていなかったが、
現地軍（上海派遣軍）に引きずられる形で
追撃を続ける

5. 南京攻略戦と南京虐殺事件

- 数をめぐって：
 - 南京軍事法廷30万、東京軍事裁判20万以上（判決は10万以上）。
 - 日本の研究者の推計：20万を上限に2万～4万
- 日本側の問題
 - ①捕虜の取扱いが不確定
 - ②現地軍の練度が低く、憲兵が少数であった
 - ③補給が間に合わず軍紀弛緩をもたらした
- 中国側の問題
 - ①防衛作戦上のミス
 - ②民衆保護対策の欠如



戦局悪化とドイツ和平調停に対する指導層の和戦態度

- 強気の蒋介石（ソ連の対日参戦に過度に期待）
スターリン「仮に中国が日本の攻撃を首尾よく撃退できたならば、ソ連は参戦しない。同様に日本が（中国を）打ち負かし始めたならば、その時ソ連は参戦する」
ヴォロシーロフ「中国の抗戦が生死関頭の時に至ったならばロシアは出兵し、けっして座視しない」
- 蒋介石：戦局の悪化を受けて一度は和平（トラウトマン調停）に傾く。
「ドイツによる調停は拒絶してはならない。これらはまだ亡国的な条件ではない」
- 和平に傾く主流派 孔祥熙、汪精衛（汪兆銘）、張群、徐永昌
→和平条件の具体的検討。
- しかし、前線の蒋介石より具体的な反問を伴う回答差し止め要求
この頃には蔣は日本側条件加重により和平から抗戦に
（背後にアメリカの対中態度の改善）
- 日本側も南京陥落をうけた世論の高まりから講和条件を加重
- 1月14日の国防最高会議：多くの者が和平を唱える。
最終意見まとまらず実質を欠いた口上書のみ伝達。
→日本側は遷延策として打ち切り

トラウトマン調停

参謀本部作戦課

→首都攻略を控えて講和に乗り出す

駐中国ドイツ大使が仲介ドイツが積極的であった理由

- ①中国との軍事経済協力
- ②対ソ牽制上の不安
- ③中ソ関係緊密化を危惧

- 孔祥熙「すでに日本が二度もドイツに調停を依頼したのであるから、われわれも検討してよい。これが至誠から出たものであれば、自ら進攻を停止して誠意を示すであろうから、われわれは死守して静かに解決を待てばよい。.....ドイツが再度斡旋してくれるならばわれわれは暫く停戦することができ、息をつく暇ができる。部隊と陣地を整えながら日本と談判し、条件が相応しければ誠実に対応すればよいし、そうでなくても対応は可能だ。われわれに相当の時間さえあれば、国外との連絡はさらに進み、国内においては補充整頓を充実させることができる。すべてがうまく行けば進退は自ら決することができる、勝算もまた生まれる」

(漢口孔祥熙→南京蒋介石 (1937年12月1日発) 蔣档002-020300002015)

- 汪精衛「もしも日本が和平要求を真に願い、受け入れ可能な条件を提起するならば、中国もまた停戦を考慮することができる」

(『国聞週報』第14巻第48期, 1937年12月, 一週間国内外大事述要, 43頁)

- 張群「戦うことができない以上、和を求めるしかない。ただし敵側の条件はおそらくわれわれが堪えられるものではないだろう」

(「徐永昌日記」1938年1月12日)

- 徐永昌「長期抗戦を絶対的に堅持することは危険極まりない」

(「徐永昌日記」1938年1月12日)